

そして、“ノコギリヤネ”は“仕合わせ”の場になる

～ 「のこぎり二」の「なかなか遺産」認定に寄せて ～



(認証式ポスターより)

第1回「のこ座」が起ち上げられ、初めて「のこぎり二」に足を踏み入れたのが、二年前の11月3日「文化の日」でした。「文化の日」そのものは、戦前からの天長節／明治節を戦後の祝日に衣替えしたものに過ぎないのですが、ワタシには、この地域の多くの人たちには何の変哲もない「コウバ」がとうとう「文化」になった日のように思えてなりません。明治天皇の誕生日が「文化の日」になるまで三世代を要したように、平松さんのお祖父さんが作られた「のこぎり屋根工場」も三世代を経て、「のこぎり二」として文化になったのです。

その11月3日に合わせるべく書き始めましたが、大幅に遅れてしまいました。それでも、なんとか、なかなか遺産認証式までには間に合ったようです。「のこぎり二」のみならず、この地域に残る多くの“ノコギリヤネ”に魅入られた“ノコギリアン”の方々のお手元に届けば幸いです。

今枝忠彦／ノコギリアン

(一宮市今伊勢出身、神奈川県藤沢市在住)

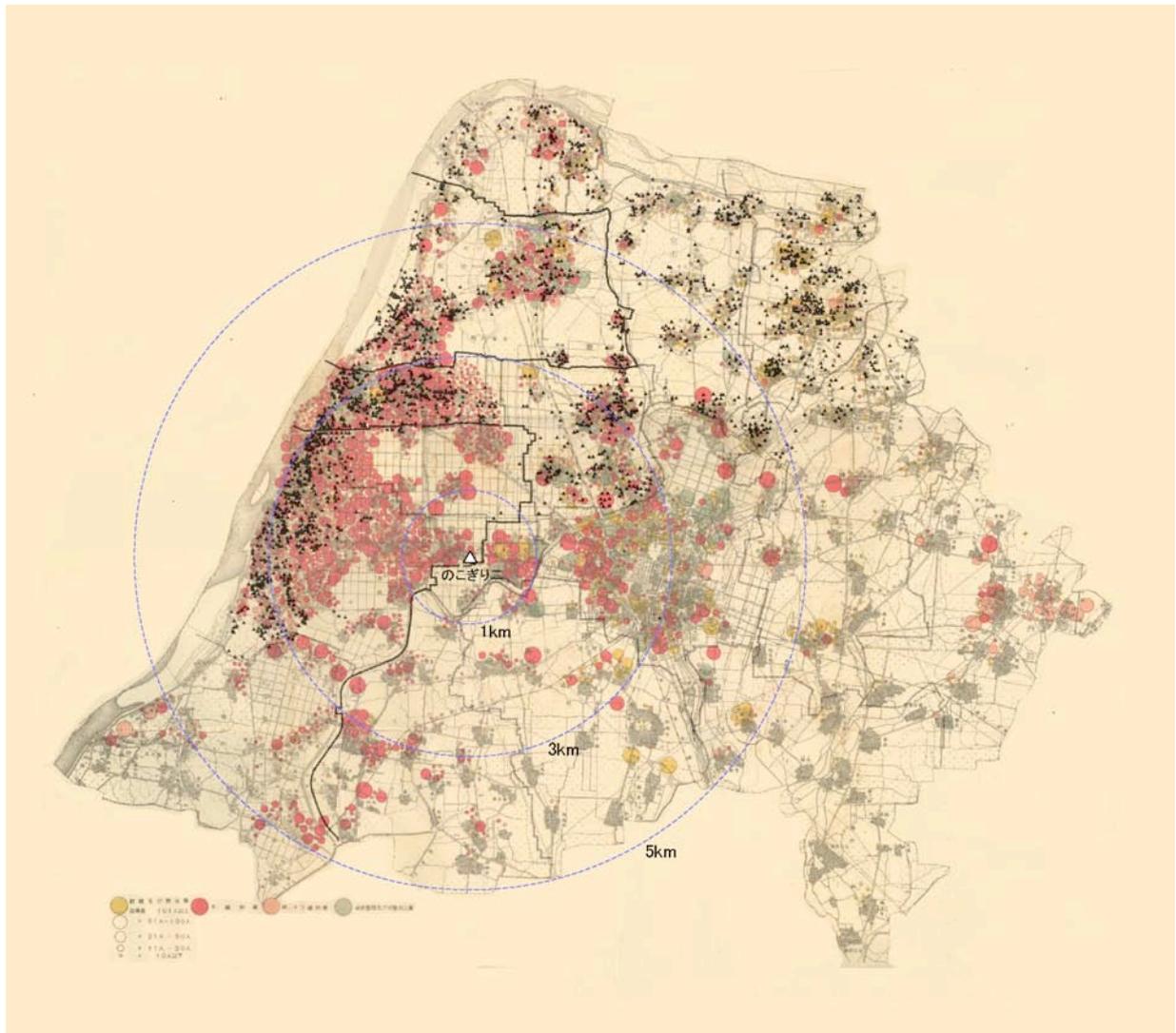


図1： “ノコギリヤネ” 重ね図：過去+現在の重ね合わせ )

資料 『一宮市調査報告書』(中部都市学会・一宮市、1958)

「尾西地方の鋸屋根工場の一次調査その1」(『産業遺産研究第18号』2011)

## ● “ノコギリヤネ” に象徴される地域社会

前頁の図は、昭和 30 年代初頭の繊維工場の分布図に、現存するノコギリ屋根工場（操業停止を含む）の分布を重ね合わせたものです。古い図、小さな図を縦や横に延ばしたり縮めたりして、エイヤッと重ね合わせた図なので正確性に欠けます。加えて、現存するノコギリ屋根工場は、ほぼ南半分が未調査のためプロットされていません。しかし、今も昔も、この一帯が、のこぎり屋根の地域であることは疑いようがない事実です。

1950 年代に増殖し始めたノコギリ屋根工場は、1970 年代にピークを迎え、その後、急速に減少していきます。昭和 30（1955）年時点の繊維工場（紡績・撚糸業、毛織物業、綿・スフ織物業、染色整理・修整加工業）は約 6,000 を数えますが、その殆どがノコギリ屋根工場と推測されます。現存するノコギリ屋根工場については、「尾張のこぎり調査団」による調査に基づけば、2010 年末時点で 2,252 棟が確認されています。ただし、市域の南半分が未調査であること、また調査後 8 年経過していることから、その数は 2,000 棟とも 2,500 棟とも言われており、実態は不明です。

市の西端を流れる木曾川寄りにかつて多くの繊維工場が集積し、「起」や「奥町」の地区にいまも多くの“ノコギリヤネ”が残っています。“ノコギリヤネ”とは、ワタシの造語ですが、工場として稼働中のものだけでなく、既にその機能を終えているものも含めた全ての「のこぎり屋根建築物」とします。この“ノコギリヤネ”から、変貌するこの地域社会の実態とともに、未来の行方を考える大きな手掛かりが見えてきます。

まず挙げられるのは、この地域の発展を担ってきた地域産業である織物業が縮小していく実態です。産業構造転換の中で致し方ない面もありますが、いまだに一宮市の毛織物業の製造品出荷額は全国の半分以上のシェア（55%）を占めています（平成 26 年）。将来の地域経済を考える重要な要素であることは間違いありません。そして、“ノコギリヤネ”の約 8 割が 1、2 連の小規模なものであることから殆どが家族経営による生業（なりわい）としてきましたが、高齢化の進行とともに、廃業に至るケースが増えているようです。それは必然的に、家族、繊維業を介して形成されてきた従来コミュニティ（家族、村落共同体）の解体の進行を伴うものであり、また、既に操業を停止した“ノコギリヤネ”の解体をさらに促すものであり、最終的にはアイデンティティとしての風景の消失につながります。そうなれば、どこにでもある地方都市と変わらなくなるでしょう。

冷静に考えれば、“ノコギリヤネ”の多くが消えていく運命にあると思われれます。いわゆる保存対象となる歴史的建築物ではありません。しかし、新たな機能への転換、あるいは暫定的な利用から建替えも含めた多様な利活用を通して、地域社会の未来を描く上で重要な役割を担うものではないはず。 “絶滅危惧種”のごとく、“ノコギリヤネ”は、日々、街から姿を消しつつあります。

「のこぎり二」は、そこに、ひとつのクサビを打ち込んだのです。「のこぎり二」は、建築家としての生業・仕事の場として、奥さんのポーラさんを加えた新たな家族のもとで、従来のノコギリ屋根を残すという、まさに“ノコギリヤネ”に対するひとつの解答を提示したのです。個人的には、いわゆる地域再生とか地域活性化といった威勢のいい将来を語ることにはあまり関心がありませんが、彼の“ノコギリヤネ”への提案に出会い、この地域において、従来とは違う未来の姿を思い描くことへの希望が生まれました。

## ●● “のこ” が開く／ひとりひとりと世界の関係性を変える

平松さんとの出会いは 3 年程前に遡ります。一宮市民活動支援センターで開催された、「ダレデモまちづくり わいがやミーティング」というシンポジウムでした（2016.1.29）。ワタシは、パネ

ラーのひとりとして参加していました。まちづくりの重要性は認めつつも、なんでも「まちづくり」と呼ぶ風潮、行政サイドの姿勢、制度化された閉塞性、そして何よりも、まちづくりそのものが主体性を欠いていることなど、かなり批判的な視点から話をしたいと思います。これでは、ミーティングのテーマに真っ向から反対していますね。30年近く、この分野に携わりながらも、まちの再生、活性化という安易な思考への抵抗感、現場での無力感などによる苛立ちもあったかもしれません。ワタシからの投げ掛けは、“ノコギリヤネ”が集積する「起」から、新たな「共同性」を探りたい。部外者は勝手なことを言うものです。ミーティングそのものは活気を帯びたものでしたが、一夜限りという側面は否めませんでした。“ノコギリヤネ”のオーナーである平松さんにどう映っていたのか。その日は、ミーティング終了後に挨拶を交わしただけでした。「のこぎり二」の存在もまだ知りませんでした。しかし、「のこぎり二」は、そのひと月前に最初の展示会である「のこぎりと蔵展」を開催しており（2015.12.30）、既に、活動を始めていた訳です。そして、「のこ鬼」から「のこ座」案内が届いたのは、出会いからおよそ十ヶ月後のことでした（2017.10.11）。

いつの時代もそうかもしれませんが、社会との関わりの持ち方が特に難しくなった感じがします。かつては、「大きな物語」として、経済成長、終身雇用、家族・コミュニティによる相互扶助など、生きていく上で信じられる価値を社会が共有していました。そこでは、世界（社会）とつながる上で、家族、会社、地域といった中間的なものが機能していました。

それが、1970年代以降、消費社会の浸透とともに地域社会が大きく変貌していきます。農村集落を基礎とした地域コミュニティ、家族が崩壊し始め、90年代以降にはグローバル化の中で会社コミュニティが崩れ、中心商店街の衰退、町内会・自治会の形骸化等々、ひとりひとりの個人と社会（世界）をつないでいた（守ってくれていた）中間的なものが機能しなくなってきました。かつて機能してきた大きな物語が機能しなくなってきました。それは、アニメ、ゲームといった若者たちの精神形成に大きな影響を及ぼす領域で明確に表現されています。いわゆるオタク文化の中に表れたセカイ系\*という言説があります。きみとぼくとの小さな関係性が、世界危機、この世の終わりなど、セカイの大問題につながるのです。そこには、地域、家族、会社といった社会的な描写はありません。個人は、世界（社会）と直接、対峙しなければいけないのです。大きな物語の機能しなくなった社会にどう対応していくのかなどが描かれる訳です。争いを避けて「何も選択しない」、「引きこもる」、あるいは生き残りをかけて「サヴァイヴ」に移行するなど。

そして、いま、ネットという仮想現実を背景に、グローバリズム／アベノミクス、AI／シンギュラリティ、持続可能な開発／地球環境、テロ／核戦争…といった、複雑なセカイの中で、社会との関わりをどう構築し、個人の生活世界をどう形成していけばいいのか。まさに、「ボーっと生きてんじゃねーよ！」とチョコちゃんに叱られそうな時代です。

そんな中であって、「のこぎり二」は、ひとりひとりの個人と世界（社会）に新たな関係性（つながり）をつくる先駆性を持っています。閉じられてきた“のこ”を開く。“ノコギリヤネ”を通して、世界（社会）との新たなつながりを見いださうの可能性が見えてきました。

※セカイ系\*：オタク文化（アニメ、マンガ、ゲーム、ライトノベルなど）をめぐる言説。ひとつの定義として、「主人公（ぼく）とヒロイン（きみ）を中心とした小さな関係性（「きみとぼく」）の問題が、具体的な中間項を挟むことなく、「世界の危機」「この世の終わり」などといった抽象的な大問題に直結する作品群のこと」（東浩紀）。嚆矢は、『新世紀エヴァンゲリオン』（1995）。セカイ系代表作として、『ほしのこえ』（2002）、『最終兵器彼女』（2000）、『イリヤの空、UFOの夏』（2001）など。

●●● “のこ” が起つ / “ノコギリヤネ” は、“縁起\*” の場となる

「のこぎり二」の魅力について、「ウツホ（空洞）」から様々なものを生み出す創造的な空間であり、多くの人たちが出会い、交錯する場として、博物学者・南方熊楠の提唱する「南方マンダラ」の「萃点（すいてん）」に喩えたことがあります（第十四回のご座備忘録 2017.12.28）。

南方マンダラは、図2のマンダラの構造が有名ですが、もうひとつ重要な側面があります。それが図3の「縁の論理」です。いくつかの解釈があるようですが（中沢新一、鶴見和子など）、以下は、いいところ取りのワタシ流の解釈であることを言い添えておきます。南方熊楠の時代、西欧自然科学は「因果律」を調べることが科学の目標とされていました。因果律とは、一つの原因に対して必ず一つの結果があり、原因と結果の関係は必然的なものとされます。それに対して、仏教では「因縁」と言う。因とは因果律であり必然法則であるが、また、縁というものがあり、熊楠はそれを偶然性と読み解き、その重要性を提示したという訳です。図3は甲乙二つの因果系列を示します。熊楠は、「縁は一因果の継続中に他因果の継続が竄入（ざんにゅう）し来たるもの、それが多少の影響を加うときは起（乙図）…。縁に至りては一瞬に無数にあう。それが心のとめよう、体にふれようで事をおこし（起）それより今まで続けて来たれる因果の行動が、軌道はずれゆき、またはずれた物が、軌道に復しゆくになり…」と記しています。簡単に言えば、数多くの偶然の出会い（甲図）において、お互い影響し合わない出会いもあるが、方向が曲げられてしまうような出会い（乙図）もあり、これを「起」と称し、大きなエネルギー（力）を発すると言います。そして、無数の因果が継続し、森羅万象ができあがっている現実をモデル化したのが「マンダラの構造」（図2）です。その中で、必然、偶然の交わりが多くなり、黒くなっているところが「萃点」ということになります。ここでは、大きなエネルギーが発生します。

「のこぎり二」を萃点、まちをマンダラに見立てれば、「のこぎり二」は、多くの因果の系列の交わり（縁）を誘発し、それが「起」となることで、大きなエネルギーを持ち、まちに影響を及ぼしていきます。それを「“のこ” が起つ」と呼びたいと思います。その切掛けとなったのが、「のご座」です。

実は、工場であった時から、多くの人が入り出る“ノコギリヤネ”はずっと“縁起”の場であり、それが「まち」を息づかせていました。これから、多くの“ノコギリヤネ”の““のこ” が開き」、「“のこ” が起て」ば、まちの全体構造を変えていく力となるはずで。

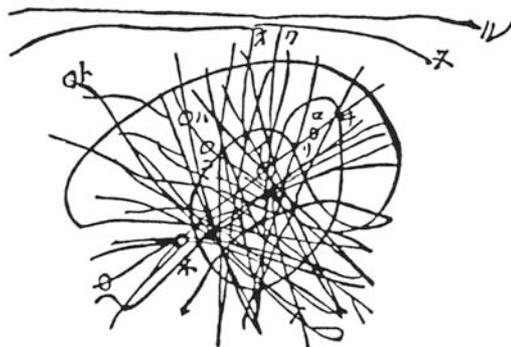


図2：マンダラの構造

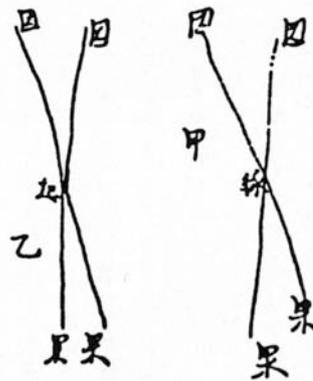


図3：縁の論理

※縁起\*：仏教用語で、「因縁生起」の略。他との関係が縁となって生起すること。自身の本体は存在せず、空である、と説かれる。

●●●● “ノコギリヤネ”は「まち」のためのもの／そして、“仕合わせ”の場となる

では、「のこ座」とは、いったい何だったのでしょうか。文化人類学者の川田順造は、物語のような創作のあり方として、一人語りのモノローグ(monologue)、受け手との対話によるディアローグ(dialogue)に加えて、「シンローグ」、「ポリローグ」という概念を提示しています。シンローグは「三人以上の発話者が協同して、撚り合わされた言説をつくっていくもの」であり、ポリローグは「二人以上の者が同じ場を共有しながらも、メッセージ授受の明確な意図を常にはもたずにそれぞれ発話するもの」のようです。そこでは、シンローグとして「座」が挙げられていますが、むしろポリローグのようなある種の「喧噪状態」から生まれる予定調和的でない物語の生成に魅力を感じます。「のこ座」は、これに近い協同創作作業のように思えるのです。その場ではとりとめのないやりとりが、やがて緩やかで、不定型な物語へと展開していく。「のこ座」の各回の報告書を取りまとめた冊子は、「のこぎり二 物語」ではないでしょうか。

あるインタビューで、平松さんがこう語っていました。「“ノコギリヤネ”は、家族のためのものじゃないんです。まちのためのものなんです。いっぱいあるんですが、みんな閉じちゃっているんです。それをもう一回オープンにして面白いまちにしていきたい…」(NHK ほっとイブニング 2018.1.25)。かつて、“ノコギリヤネ”は、みな開いていました。敷地の奥にあっても、庭や狭い路地を通してまちにつながっていました。そんな「奥ノコ」や「路地ノコ」が開かれ(「“のこ”が開く)、そこに幾つもの“縁起”が発生し(「“のこ”が起つ)、それぞれの“ノコギリヤネ”から物語が生成される。このような「いくつものワタシの物語」の重なり合いが、楽しい「まち」をつくり出すのではないのでしょうか。アニメのセカイではないリアルの世界において。

まち、地域の再生、活性化などよく言われます。なんて古くて、ダサイ言い回しでしょう。楽しいまちのイメージ、物語が生まれるためには、もっと“深い”コトバが必要です。例えば、中島みゆきの歌う『糸』。“ノコギリヤネ”は、かつて、そしていまも、何本もの糸が撚り合わされ、織りなされて布をつくる場です。“ノコギリヤネ”はカタチを変えた“縁起”の場となり、家族だけでなく多くの人たちとともに、「いくつものワタシの物語」を生み出し、“仕合わせ”の場となるのです。ワタシが、「のこぎり二」に出逢ったのも、「仕合わせ／幸せ」に他なりません。

「のこぎり二」に続くであろう、多くの“ノコギリヤネ”に幸あれ！

…

縦の糸はあなた 横の糸は私  
織りなす布は いつしか誰かを  
暖めうるかもしれない

…

織りなす布は いつか誰かの  
傷をかばうかもしれない

…

逢うべき糸に 出逢えることを  
人は 仕合わせと呼びます

(「糸」作詞・作曲：中島みゆき)

(2018.12.14 8:30p.m.)